

山口県立大学 郷土文学資料センターだより

嘉村礒多生家「帰郷庵」10周年記念講演会



講演会開会



渡辺純忠山口市長挨拶



荒川洋治先生講演風景

多田美千代（嘉村礒多を読む会 顧問）

待望の荒川洋治先生のご講演は、嘉村礒多生家「帰郷庵」10周年記念講演会として、コロナ禍を危ぶまれるさ中、参加者限定で行われました。

日時：令和2年11月8日（日）11時から13時／演題：「嘉村礒多の世界」／講師：荒川洋治先生。現代詩作家・批評家。1949年、福井県生まれ。日本芸術院会員・中原中也賞選考委員他。代表著書『文学は実学である』（みすず書房 2020年10月）／主催：山口市・嘉村礒多生家の会・嘉村礒多を読む会／会場：クリエイティブ・スペース 赤れんが／参加者：37名

2時間に及ぶ講演は、洋の東西を問わぬ作品を視野に熱く語られるものでした。あまたあるご著書の中から敢えて近著『文学は実学である』を代表作とされた意味も、十分納得できました。

聴講者3氏の感想と生家案内記

■ 礒多小説の「開放」

池田 誠（中原中也記念館 学芸員）

嘉村礒多の私小説は、梶井基次郎や太宰治といった同時代の私小説とは異なり、あくまで自己を倫理的に問い詰めることに眼目が置かれた、閉ざされた世界があるだけのように思われ、研究対象としては遠ざけていた。

しかし一方で、礒多の小説には、そのこだわりからにじみ出る独特な魅力もあることも感じていた。その魅力を深く味わう道筋を、講演を通じ、荒川氏に教えられたように思った。

荒川氏によれば、小説には、読者を物語に招き入れるか、開放を拒むか、という分岐点があるが、礒多の小説は読者を拒む方向で押し通していく。例えば、「業苦」では、冒頭から「圭一郎」と「千登世」の二人が登場するが、二人の関係や境遇など、読者を物語に招き入れるための内容を閉却したまま進み、読者は物語に入り込めない。

しかし、それでもしつこく読んでいくと、いつの間にか、説明のない固有名詞が一般化し、物語が読者に「開放」される。それは礒多が意図したものではなかったかもしれないが、確かにあるものだ、という。

私は自分が礒多の小説に感じていた魅力を、そこに見たように思った。そして、この「開放」を、文学研究の方法によって説明することが今後の課題となった。

■ 世界文学の中で考える

小林 雅 昭 (元・嘉村礒多顕彰会 会員)

「図書新聞」(7月25日付)による2020年上半期の読書アンケートで、荒川さんは3冊の内1冊に多田美千代さんの『みつかった礒多の習作～嘉村礒多ノートⅣ』(私家版)をあげています。「文学作品を知ることのよろこびが伝わる好著」と短評がありました。アンケートからわずかの期間に実現した思いもよらない講演会に喫驚しました。

さて、期待を超えるお話に目を開かされました。荒川さんが「分岐点」と言い表す礒多小説の欠点、それに「高揚感がある」という表現にも鋭い感覚を感じました。

しかし、真に伝えたかったことは講演の後半にありました。荒川さんはセルバンテスの「ドン・キホーテ」、ルソーの「告白」、ワイルダーの演劇「わが町」の3作をあげ、〈嘉村礒多の世界〉へいざなつたのです。衝撃的でした。

山口市に住まいして改修、保存された仁保の生家にも親しんできました。しかし、礒多の世界を取って狭く読んでいたのではないかと。後半の話聞きながらそのようなことが頭をめぐりました。

世界文学の中に礒多を置いてみると視野は広がります。

ドストエフスキー、ルソーが嘉村礒多につながってくる、と話しドキッとさせました。しかし、「わが町」の中でエミリーが墓石の下から問いかけた「生きている間に人生は分からない」を嘉村の世界にどうつなげるか。荒川さんの問いかけでもあっただけに、まだまだ講演の入り口に立っているようです。

■ 文学に向き合う姿勢

中 村 佳 恵 (主婦)

今回の講演では、嘉村礒多の世界を通して、作家が、また読者が、「文学」に向き合う姿勢について考えさせられました。

作家は、徹底的に言葉を選び、表現を駆使し、書きたい内容に対し妥協することなく向き合なくてはなりません。礒多は、たとえば梶井基次郎「檸檬」の丸善の書棚のような印象に残る場面を描く力に乏しいという弱さがあるものの、究極のところまで自己を描く姿勢を貫き通した稀有な作家です。

読者は、礒多のように徹底した姿勢で人間を描いた作品によって、読む楽しみが味わえるだけでなく、実社会の人間についても広がりを持った受け止め方ができるようになります。何事も拘り定規にとらえられがちな今だからこそ、文学作品を通してものごとを柔軟に受け止める目を養うことが大切なのだと思いました。

先生の最新刊『文学は実学である』の中に「この世をふかく、ゆたかに生きたい。そんな望みをもつ人になりかわって、才覚に恵まれた人が鮮やかな文や鋭いことばを駆使して、ほんとうの現実を開示してみせる。それが文学のはたらきである。」という文章があります。礒多はそんな才覚に恵まれた作家のひとりだと実感した講演でした。

■ とり急いでの文学散歩

中 西 祐 介 (嘉村礒多を読む会 代表)

講演会が終わり、荒川洋治先生を礒多の生家へ案内した。

荒川先生は礒多生家が「帰郷庵」となる前に二度訪れられたとか。道中は仁保駅や礒多の通った大富尋常小学校跡を案内しながら向かった。

古民家施設になった「帰郷庵」を管理人の方に案内してもらいながら、先生は昔訪れた際の記憶と照らし合わせておられるようだった。礒多の妹、イクヲさんとのお話や本棚の場所だとか。

嘉村家のお墓に向かう。事前に読む会のメンバーでお墓掃除されていて綺麗だった。先生はイクヲさんのお墓に注目されてメモを取っておられた。

帰りは「神前結婚」の舞台となった妙見社へ。先生のお帰りの時間を考えて近道を選ぶ。道は狭いが車で上まで行くことができた。

礒多が通った信行寺の前を通り、時間に少し余裕があったので、仁保駅に立ち寄った。駅舎は跡形もないが、出奔後初めてチトセを連れて帰りついた駅である。

予定の時間までに荒川先生をホテルに送り、ほっと胸をなでおろした。



素顔の赤江瀑

川野 裕一郎 (東亜大学芸術学部教授)

赤江瀑は小説家であり主に芸能、美術工芸の世界、京都などを舞台にして耽美的作風で現在でも全国にファンを持つ作家である。そんな赤江瀑との出会いと素顔を紹介したい。

もう、20年も前になるだろうか、夜更け過ぎ、下関にある「E」という行きつけのバーのママが「今夜は面白い方がいらしているから紹介するわね、こちらが作家の赤江さんよ」「赤江さんはすごい賞をいっぱいお取りになって博学で」というママを気恥ずかしそうに制して「赤江です」とニコリ微笑んだ方が2012年に亡くなった鬼才 赤江瀑さんであった。色の入った眼鏡の奥には曇りのない澄んだ眼差しが印象的で小綺麗な初老の男性と言った印象だった。そこで、続けてママが「川野さんは絵を教えてらっしゃって展覧会などされていたりするから多分感性的にも話が合うかも」などと言って紹介された。

しかし存じ上げない小説家だったこともあって何から喋っていいのやら分からずにいたが「どこのご出身?大学の専攻は」とか聞かれたので葛飾で生まれて上野の大学で油絵専攻しましたと答えた。それから色々話しているうちに京都が好きで仏像や障壁画など、共通の話題で盛り上がったと記憶している。ソフトでゆっくりと語るところが印象的であった。酒量も進んできてコアな話題にもなり、中でも浄瑠璃寺の九体阿弥陀が壮観で見事な一堂に揃うお姿に圧倒された事や秋篠寺の技芸天の優美さ、當麻寺の四天王像は白鳳時代の翳やかで迫力のある乾漆立像の美しさについて、絵画顔料や蜜陀僧の事などなど出てくる知識が豊富で語彙の多さには「さすが作家の方ならではの博学さと知識の幅広さ」を体感した。それから公私に渡って付き合いさせていただき数年が経った。

亡くなる前の年に講演会があった。このような有名な作家が今まで講演会を一度も開催していなかったのも驚いたが最初で最後(と当時は思ってもいなかった)の講演会を聞きに岩国市中央図書館へと向かった。2011年12月、演題『踊れ、と彼が言ったような。』冒頭からゆっくりと作家になった経緯や舞踊、舞踏、自身の作品の映画化までの裏話、幅広い知識の源泉から湧き出るエピソードなども交えたあつという間の2時間であった。終わりにわざと本を持ってサインをねだったら「あんたようやるわ」と冗談まじりにサインをしてくれた。明け透けでなく、ベラベラ喋るのを憚っていて都会的で洗練された赤江さんの講演会だった。



講演会で赤江氏と私

後年、赤江さんを囲んだ仲間の集いを月イチくらいのペースで開催し、赤江さん呼び出しては絵画、舞踊、小説、あらゆるジャンルの話題で毎回盛り上がっていた。よく彼が語っていた言葉で「初心忘るべからず」を肝に命じておく事ですよ。世間の認識は「始めた頃の謙虚で真剣な気持ちを持ち続けていかねばならない」けど世阿弥が言った意味の方が核心をついている。「何かを始めたときの下手だったときの記憶、初めて味わった悔しい気持ちや恥ずかしさを忘れてはダメだ」今も赤江さんを思い出すとこの言葉が心の中で囁いている。作家赤江瀑の素顔とは、あれこれと思い出してみただけだが幅広くいろいろな事を追求し、とことん調べ上げていく、その調べたものの中に美を見出して、その美を自分の言葉で作り出す芸術家だったのだと。そして、単に京都や古都の美しさを花鳥風月的に崇め奉るのではなくそこにあたかもそこに魂が存在するべく因習や念を複雑に交差する不思議な迷路を作り出す赤江瀑という人間の原点を見ていたような気がしてならない。粹でいてこっぴどかしいような仕草が今も目に焼き付いている。芸や美の話の虜であり、それを妖艶で華麗な様式美を追求し書き続けた赤江さんが亡くなってもう8年が経とうとしている。



赤江瀑 原稿

付記

現在、東亜大学図書館ではML 連携ミュージアムライブラリーを開催している。

赤江瀑の原点とも云うべき本名長谷川敬の名で作上げたデビュー前の作品群に注目し早稲田大の同人誌「詩世紀」と関門の作家を中心とした文芸誌「埠頭」への寄稿作品にスポットを当てて展示しています。

郷土文学資料センターの移転について

稲田秀雄（センター長）

このほど当センターは、旧キャンパス（南キャンパス）の北、丘の上の北キャンパス（新）3号館2階に移転しました。そのことを以下にご報告いたします。

もともと当センターは昭和61年（1986）に設立されて以来、南キャンパス旧3号館に拠点を設けていました。1階の日本文化資料室がそれです。それ以前、旧3号館1階の安光裕子研究員の研究室に保管されていた郷土文学資料は、同1階の国文演習室に移されていましたが、平成8年（1996）の文学部国文学科の終焉とともに、この部屋は国際文化学部の日本文化資料室となり、日本文学・日本史関係の一般的な図書と同居する状態が長く続きました。やがて、本学附属図書館所蔵の貴重資料が当センターに移管されたことをきっかけに、耐火金庫等を購入し、旧3号館1階にあらたに設けられた資料室に据えました。しかし、平成18年（2006）の独立法人化に向けて、資料室とその隣の研究室を独法化準備室にするため、貴重資料その他は金庫とともに、旧3号館の2階へ引っ越しし、そこが新しいセンター資料室（書庫）となりました（日本文化資料室はそのまま）。

そして、令和2年（2020）9月8日、日本文化資料室やセンター資料室の保管資料は、一斉に新3号館へ移送されました。資料の箱詰め作業は、7～8月から加藤禎行研究員の指示のもとに、文化創造学科の学生スタッフの援助を得て始められており、廊下には約250箱に及ぶダンボール箱が積み上げられました。このうち、耐火金庫内の貴重資料を除き、9月8日中に、業者のトラックによって移送がなされたのです。引き続き、図書・雑誌の配架等の整理作業が10月にかけて行われ、11月12日には金庫内の貴重資料を研究員が慎重に運び終え、旧3号館からの移送作業はひとまず完了しました。

こうして、当センターは、現在、丘の上の北キャンパス（新）3号館2階に、郷土文学資料センター閲覧室（C211）、その奥に同資料室（C212）を備えることになりました。なお、南キャンパス旧2号館の空き教室では、和田健氏旧蔵資料の整理作業が今も続いています。これらの資料の移送には、まだ時間がかかりますが、長年の日本文化資料室との同居状態を脱して、独立した部屋を設けることができ、喜びを禁じ得ません。設計段階から種々のご配慮をいただいた大学当局に感謝するとともに、暑い中、移送前後の準備・整理作業に尽力いただいた当センター研究員及び学生スタッフの皆さんに厚く御礼申し上げます。これからも当センターの活動に一層のご理解・ご協力を賜りますよう、この機会にあらためてお願い申し上げます。

寄贈図書（2020年5月～2020年11月）

明日を紡ぐ大地の会上演台本『朗読劇 富岡先生』、河村正浩『朗読句集 うふふふふ』、田村葉『句集 風の素描』、山口県立大学地域共生センター『山口を元気にする山口県立大学の達人たち 研究者活用ガイドブック2020』

寄贈雑誌（2020年5月～2020年11月）

『大内文化探訪』第38号（大内文化探訪会）、『Cul-ちゃ やまぐち』第7号（やまぐち文化プログラム実行委員会）、『其桃』第905～912号（『其桃』発行所）、『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第14号（神戸女子大学古典芸能研究センター）、『佐波の里』第48号（防府史談会）、『秋芳町地方文化研究』第56号（秋芳町地方文化研究会）、『大地通信』第36、38号（明日を紡ぐ大地の会）、『風響樹』第52号（風響樹同人）、『颯』第114～115号（颯文学会）、『ふるさと通信 きずな』第11号（ふるさと紀行編集部）、『芸芸山口』第351～354号（山口県芸文懇話会）、『やまなみ』第37号（やまなみの会）、『山彦』第157～160号（山彦発行所）

編集後記

コロナ禍は続くものの、徐々に文化的な催しが行われるようになってきました。川野裕一郎・多田美千代両氏には、展示・講演に関わる原稿をお寄せいただきました。また、郷土文学資料センターは新キャンパスに移り、稲田センター長より経緯をご報告いたしました。文化の灯を消さないことが肝心です（菱岡憲司）



■編集発行：山口県立大学郷土文学資料センター（〒753-8502 山口市桜畠 3-2-1）
TEL. (083) 928-0211 FAX. (083) 928-2251
■発行日：2021（令和3）年1月25日